

## 次期学習指導要領は「学びの地図」

教育創造研究センター所長 たかしな 高階 れいじ 玲治

## 1 次期学習指導要領改訂の基本方針

中教審は次期学習指導要領改訂の論議を進めてきたが、8月26日にこれまでの『審議のまとめ』を公表した。今回の改訂は従来にない新たなチャレンジがある。

その背景には、グローバル化の進展やAI（人工知能）の進化など、未来予測が困難な社会の到来に向けて子ども個々にどのような「力」を身に付けるかという難しい課題が存在するからである。次期改訂の基本は新しい時代に求められる資質・能力の育成として「社会に開かれた教育課程」を構想している。

それは従来のように「何を学ぶか」を強調するのみでなく、学んだことが生活や社会の中で生きて働くように「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を子どもに身に付けることである。

その重要な視点について『審議のまとめ』は、「生きる力」の3つの柱として位置付けている。

- ①生きて働く「知識・技能」の習得
- ②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養

この3つの柱は、各教科等全てにおいてどのように考えられるかが明示されている。現時点では各教科等の具体的な内容までは示されていないが、基本の考えとして3つの柱があり、今後それに基づく目標、内容、方法、評価等が示される。

また、『審議のまとめ』では、新しい学

習指導要領を子どもたちや教職員のみでなく、広く国民に伝えたいとして「学校教育を通じて子供たちが身に付けるべき資質・能力や学ぶべき内容などの全体像を分かりやすく見渡せる『学びの地図』としての役割を果たせるようにすることを目指す。」としている。

## 2 学習指導要領の構造はどう変わるか

将来に向けた子ども個々の「力」の形成に及ぼす学校教育の役割は大きいですが、次期改訂において英語科が導入される小学校で授業時数は増加するが、中・高校は変わらない。そこで重要になるのが、限られた授業時間で学ぶ学習内容・方法の質・量の問題である。

アクティブ・ラーニングが強調されているが、それは授業時間消費型であって、効果的で効率的なカリキュラム・マネジメントが必須の課題である。

そこで次期教育課程は、「学んで得た力」が他の学習に転化できる汎用性を持つ学習が強調されている。単に各教科等の学習内容を指導すればよいのではなく、教科等を超えて教育課程全体を通じて育成される資質・能力が重要である。『審議のまとめ』は次の事項を示していることに注目したい。

一つは全ての学習の基盤になる言語能力、情報活用能力（プログラミング的思考、ICT）、問題発見・活用能力、他者と協働する力、などである。二つは、現代的課題への対応としての健康・安全や食育、主権

者意識、多様性の尊重などである。

このことは学校の教育課程が教科等ごとの配列で終わるのではなく、教科横断的な視点で学びを深めることが必要になることを意味している。そこで『審議のまとめ』は、カリキュラム・マネジメントについて次の3つの視点が重要としている。

①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。

②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。

③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

つまり、各学校のカリキュラム・マネジメントが極めて重要になってくると言える。

また、アクティブ・ラーニングについても「深い学び」に至るプロセスを「主体的・対話的で深い学び」の文言で統一している。その意味は、子どもたちが学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付けることを通して、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けることへの期待である。

ただ、『審議のまとめ』の段階では、学級活動に「キャリア教育」が導入されることは確かであるが、各教科等の学習内容は具体的に示されていない。「学習内容の削減は行わない」と断定されていることから、今後の改訂作業が注目される。

### 3 今後の改訂スケジュールと学校の対応

中教審によれば、次期改訂のスケジュールは、12月までに『答申』を発表し、3月

末までには学習指導要領を改訂したいとしている。今回のスケジュールで従来と異なるのは29年度中は「周知・徹底」とされていて、幼稚園は30年度に全面実施であるが、小・中学校は「先行実施」となる。小学校の全面実施は32年度、中学校は33年度である。その間、小学校は30年度に教科書検定、31年度に教科書採択・供給となる。中学校は1年ずれる。

従来よりもやや余裕がありそうであるが、何よりも次期学習指導要領について周知・徹底が必要と考える中教審の意向が強いと感じる。それを受けて各学校はどう対応すべきであろうか。

まず何よりも次期教育課程をめぐる多様な課題や内容についての情報収集と校内の共通認識が必要である。次期教育課程は新しく導入される教育内容が多く、そのレベルは複雑で困難度が高いと考える教員が増えている。新しい教育の理解・受容が何よりも重要であってそのための校内の体制を整えたい。

次に課題となるのが学校で編成する教育課程である。先に述べたように新たな視点による教育課程編成に向けたカリキュラム・マネジメントであるが、従来の調査を見ても学校の対応はかなり難しい。多忙化、不慣れ、共通認識の欠如など、学校の課題は多い。

ただ、今回登場したアクティブ・ラーニングについては積極的に実践化しようとする学校が多くなっている。また、教科を超えた協働の体制づくりを進める学校も増加している。全ての学習の基礎となる言語能力やICTの活用、体験活動や他者との協働、メタ認知の育成などは、今からでもチャレンジしたい学習活動である。「学習する教員組織」を構築し、学校力、教師力を高めることが今後の必須の課題である。

## 目標設定と手立ての改善・話し合い活動を通して、 道徳性の向上を図るため生徒指導主事として取り組んだこと

浦安市立入船中学校教諭

はなわ  
塙

ひろし  
洋



### 1 はじめに

本校は、平成23年度に19学級の浦安市内最大規模の学校であったが、平成26年度に高洲中学校との分離を経て、現在は7学級の学校となっている。この数年で、様々な変化があったが、入船中はあいさつがしっかりできる、明るく前向きな学校であると考えている。生徒たちが、目標に向かって、より努力できるようになった一つの転機が、平成23年度から本格的に考え始めた、学校教育全体で道徳性の向上を図るという取組である。生徒指導主事として取り組んだことを以下に紹介する。

### 2 道徳性の発達段階を示した、道徳教育

#### (1) 学校や学級における貢献

コールバーグ, L. の示す道徳性の発達段階に基づき、学校や学級に対する貢献の度合いを道徳的な発達段階と照らし合わせて分かりやすく、生徒に示し、集団に貢献する大切さを理解することで生徒の意欲や自己肯定感を高める取組を実践している。道徳性の発達段階のモデルは以下のとおりである。

#### 前慣習的レベル

##### 第1段階 罰と服従志向

自分一人称で、自分のことしか考えない。

##### 第2段階 道具主義的相対主義志向

相手二人称で、相手一人のために役に立つことができる。

#### 慣習的レベル

第3段階 グループ三人称で、小集団に貢献することができる。

第4段階 集合体を考えることができ、集団(学級全体)に貢献することができる。

#### 脱慣習的レベル

第5段階 集合体を考えることができ、集団(学校全体)に貢献することができる。

第6段階 原理に基づく見方ができ、当たり前だと思っている規範をそれでいいのか見直し、話し合いを通じた合意形成をすることができ、学校全体や地域に貢献することができる。

以上のモデルを基に、3段階、4段階の

生徒が増えてほしいという願いを教師が日々伝え、生徒の生活の意識の中心に「貢献」というキーワードが根付き、集団のために力を発揮し、自己肯定感を高められるように努めた。

#### (2) 部活動における貢献

コールバーグ, L. の示す道徳性の発達段階に基づき、部活動においても、集団に貢献する大切さを理解することで勝利のみにこだわるのではなく、負けてしまってもチームに貢献できたという自信や自己肯定感を高める取組を実践している。道徳性の発達段階のモデルは以下のとおりである。

第1段階 自分のことしかしない

第2段階 ペアのために役に立てる

第3段階 グループのために貢献できる

第4段階 チームのために貢献できる

第5段階 部活動での取り組みを通して学校全体に貢献できる

第6段階 部活動での取り組みを通してチーム全体に貢献できる

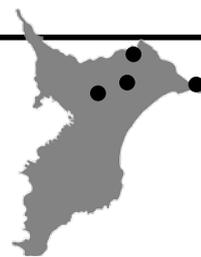
以上のモデルを基に、中学校の教員全体で共通認識を持ち、部活動の運営をしている。チームの活動目標や活動目的を設定し、部員がそれに向けて、それぞれ貢献する経験を通して、部員の自己肯定感を高める取組をした。

### 3 最後に

私は、生徒たちが前向きに目標に向かって努力できる場所を安定して提供することが学校の一番大切な仕事の一つだと考えている。「～しない」や「～してはだめ」、「～のせいでできない」、「～が悪い」などのマイナス面に、生徒が目をつけているのはこのような学校の実現は難しい。目標に向かって努力し、集団に貢献することで自己肯定感を高めていくことが、生徒たちが安心して、自分の力を発揮できる学校づくりにつながると信じ、これからも生徒の道徳性向上のため取り組んでいきたい。

# 千葉歴史の散歩道

## 日本遺産「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」



千葉県教育庁教育振興部文化財課・指定文化財班長

しまだて かつら  
島立 桂

平成28年4月、千葉県ではじめて「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」が日本遺産に認定された。そこで、認定された「ストーリー」と各市で見られる構成文化財の一端について紹介したい。

江戸時代、北総地域は、利根川の水運と街道が整備されたことで、隣接する百万都市江戸にとって重要な役割をはたした。例えば、利根川は東北・北関東からの物資や銚子港で水揚げされた魚介類の運搬ルートとして機能し、佐倉・成田街道は江戸と北総とを結ぶ幹線路として、人々の往来が絶えなかった。こうして、江戸のくらしや経済を支える一方、江戸の文化がもたらされたことで、北総には城下町佐倉、門前町成田、商家の町佐原、漁港・港町の銚子という4つの特色ある都市が発達した。

この四都市には、江戸時代の庶民が息づいていた町並みや風景が残り、今も東京近郊にありながら江戸情緒を体感することができる。

それでは、四都市で体感できる「江戸」には、どのようなものがあるだろうか。

JR佐倉駅から北西に1.5kmほどの高台に国立歴史民俗博物館の建つ佐倉城跡があり、本

丸跡や堀、土塁が残る。そこから東へ向かうと武家屋敷群、旧佐倉順天堂などが点在する。また、県立佐倉高等学校には堀田家の資料「鹿山文庫」が保管されており、武家の生活や洋学を学んだ者の足跡がしのばれる。

成田山新勝寺には、初詣や節分などで多くの参拝客が訪れ、往時から続く成田参詣は今なお喧噪のなかにある。新勝寺の伽藍とともに、門前町の参道に軒を連ねる店舗も昔ながらの面影を残している。

佐原には、利根川へ続く小野川の兩岸に商家の町並みが見られる。小舟がひしめく小野川と活気あふれるありし日の商人の姿に思いを巡らせ、伊能忠敬の歩測をまねて、生家の前に架かる橋を渡るのも、佐原ならではの楽しみではないだろうか。

銚子電鉄外川駅から徒歩数分で漁港を望む急な南斜面に着く。ここは、江戸時代、紀州の崎山治郎右衛門にはじまる外川の町並みである。碁盤の目のような区画の中で、家々が静かなたたずまいを見せている。

是非、北総四都市を訪ね、江戸の情緒を感じていただきたい。



城下町佐倉（武家屋敷）



門前町成田（新勝寺参道）



商家の町佐原（小野川流域）



漁港・港町の銚子（外川）

千葉教育 梅 (No.641) 平成28年11月30日発行

編集・発行 千葉県総合教育センター (代表) 安藤久彦  
〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13 TEL 043-276-1204  
URL <http://www.ice.or.jp/nc>

印刷所 株式会社白樺写真工芸  
〒263-0002 千葉市稲毛区山王町102-5 TEL 043-423-1101